

営業スキル向上勉強会(#31)

2017年6月9日

書籍タイトル：「英語を話せる人」と「挫折する人」の習慣

今回この本を読んだ目的、きっかけ：

これまで主に、営業スキル向上や自己啓発の著書を読んできたが、たまには気分を変えてそれらとはあまり関係のない領域のものを讀みたかったので、手に取った。

また、著書の腰巻(下側の帯)に書かれていたが、「TOEICより英検」というフレーズに関して、私は英検は受けたことがあるが、TOEICは受けたことが無い。

何故著者がそう考えるのか、その理由が分からなかったので、気になった。

概要：

この著書を著者が書くに至った経緯を説明する上で、まず簡単な著者の紹介から入る。

著者は、海外暮らしや留学の経験も一切ない。さらには英会話学校に通った経験もない

し、外国語教授法を大学院で修めてもいない。英語には一切無縁の環境で育ったそうだ。

それにもかかわらず、大学卒業後外資系企業数社にて役員秘書・エグゼクティブアシスタントとして、様々な国の社長や重役のもとで通訳や翻訳を含む業務を担当したそうだ。さらには、「英語コーチ」として、小学生からビジネスマン、専業主婦まで様々な職業や年齢の人に教えてきたそうだ。

英語に無縁だった著者が、どうして“英語漬け”の人生を送ることになったのか…。

きっかけは、中学に入学した時に始めたNHKの『基礎英語』だったそうだ。

これに魅せられて、今、英語に関わる仕事をしているそうだ。

著者は英語を話せるようになるためには、英語の勉強を正しく「習慣化」する必要があると考えている。

英語は、日本語と同じくひとつの「言語」だ。英会話学校に通えば、いきなり話せるようになるわけではないし、手っ取り早く話せるようになる方法もない。そう考えているときこそ、「急がば回れ」なのだ。正しい勉強法を「習慣化」し、やり続けると効果は必ず出る。

この著書は、「どうしたら英語ができるようになるのか」「どの教材が続けやすいか」「どの学習法がより効果的か」を文字通り“人体実験”してきた結果、英語を上達させるために行うべき「習慣」が貯まってきたのを、英語学習に悩む方に知っていただきたいという思いで書いたそうだ。まずはこれらの「習慣」を1年続けてみよう。必ず効果が出るだろう。

参考にしたい点、気になる点

1. 「話せる人は日本語でも話し上手、挫折する人は日本語でもとりとめない」

生徒の中には、『『あなたの話は長すぎて分からない』とよく言われる』という人がいるそうだ。

なぜ相手に分かってもらえないのか。結論から言うと、「話が長い」からではないのだ。こちらの質問していることと違うことを答えている、もしくは、こちらが期待している答えと違うものが返ってくるので戸惑うのだ。

「自分の話し方にはこういう傾向があるな」という自覚のある人は、普段日本語で話す時も、話の組み立ての練習をしよう。相手に「??」という顔をされたら、「ごめん、私の今の話、どこが分からなかった？」と聞いてみるのも手だ。

練習法としては、まず日本語でやってみるのがお勧めだ。

例えば、

「毎年、多くの日本人が外国へ旅行しています。これは異文化を学ぶのにいい方法だと思いますか？」これに次の回答として次の×と○があるとする。

×「はい。海外に行けば、英語が上手になると思います。」

○「はい。海外に行けば他国の人の暮らしを実際に自分の目で見て、体験することができます。」

×の方は質問の意図を取り違えている。英語上達ではなく異文化学習が目的だ。もちろん、「語学」も異文化のひとつではあるが、ここではもう少し広い意味での「文化」について聞いているので、質問に対する答えになっていない。この質問に対して、○のように答えれば、質問との整合性が取れている。

これは、何度も練習するのが一番だ。家族や友人に日本語で質問してもらい、質問の意図にあった答えが日本語でできるようになってから英語での練習をすると効果的だ。

2. 「話せる人は悔しがり、挫折する人は切り替えが早い」

試験に失敗した、プレゼンがうまくできなかった、英語を使う会議で完膚なきまでに叩きのめされた…このようなことがあったとき、「ああ、もう勉強はやめよう」と思うのか、それとも「悔しい」「悔しい」「ああはならなかったはず」と自分自身に対して言い続けるのか。

「悔しさという感情に徹底的に向き合って、悔しさを決して忘れない」人は、どんどん成長していく。挫折を何度も繰り返しても、そのたびに体勢を立て直しチャレンジできれば、飛躍するチャンスに巡り合えるわけだ。

これが「ま、しかたないね」「時間もなかったし」「部長も英語できないし」「また今度頑張ればいいのか」「というか、英語なんかやる必要ないかもね」という人だったらどうだろうか。ある意味、「挫折が無い人生」だ。失敗したらそこでやめてしまう。

「話せる人」は失敗や挫折経験をどう活かすかを心得ているようだ。その第一のポイントが「悔しさを忘れない」こと。失敗したら「悔しい！」と思う。そして、ずっとその悔しさを反芻して、悔しさを忘れないようにする。そうしているうちに、自分の中で「今度はこうしよう」と、気持ちが“前向き”になるタイミングが来る。その時に、まず、うまくいかなかった原因を見つけ、それらを1つずつ検証し、次は失敗しないように、反省し、計画を立て、それを記録に残す。

この時の反省は、失敗した経験があるからこそ得られる財産だろう。

挫折をしたからこそ得られた貴重な財産を活かせるのは、挫折した人間だけだ。

3. 「話せる人は Thank you. の理由を明確に言い、挫折する人は以心伝心を試みる」
英語の会話では、質問されたことに対し「なぜならば～」と説明を加えることが大切だ。日本人同士なら、「まあ、おそらくこういうことが言いたいのだろう」とこちらの気持ちを讀みくれるが、外国人は原則として「意を汲んで」はくれない。なので、「どうしてそう思うのか」を明確にすることがコミュニケーションの基本だ。

この「理由づけ」の典型的な英語表現が、Thank you for ～ だ。

ただ、注意しなければならないのは、日本人が良くやりがちな

「Thank you for today.」だ。これはネイティブの人たちにはわからない。何に対する感謝か、具体的に言わないと分からない。お礼を言いたい時は、たとえば、

「Thank you for coming today.」や「Thank you for the productive meeting.」といったように、具体的な事項を上げて感謝することになる。

また、日本人の会話には sorry が多いとよく言われる。

すぐに謝る日本人、ではないが「申し訳ありません」の意味で sorry を頻繁に使う傾向は確かにある。もちろん、遅刻したなどこちらにはっきりとした非があるときには

「Sorry I am late.」や「Sorry for interrupting you.」というが、日本人は、電話などで待たせた時の表現が、英語とは違う。

例えば問い合わせの電話がかかってきて、それに対し何か調べ物をするために保留にしたとする。その保留を解除して再び話し出す時の第一声は、日本人は、「お待たせいたしましたして申し訳ございません」、一方、英語は「Thank you for waiting.」となる。日本語と英語では「謝意の表し方」が違うことを知っている、外国人にもうまく感謝を伝えられるようになる。

感想

明日香出版社から出版されている著書は毎回とても分かりやすいと思う。

50項目の見出しがあり、各見出しが「できる人はどうして、出来ない人はどうして」いるかについて比較し、その後その説明として、まとめられている。

内容もなるほどというものが多かった。また、今回は「参考にしたい点、気になる点」に

挙げなかったが、p.166の「話せる人は英検で語学力を高め、挫折する人は「英検は時代遅れ」という。」は確かにと考えた。簡単にまとめると、英語を身に付けるにはまず英検を使って勉強することがお勧めで、今の自分の英語力がどの程度か、どこが弱点かを把握し、勉強計画を立てるのにも向いているということだ。

今後、海外出張に行くことがあるかについてはまだわからないが、もし行くことになったら、英語は国際語なので、通じることも多いだろう。

だが、自分が英語が分からないと、そもそも英語で話すという選択肢すら選べない。

余裕があったら、簡単な日常会話程度は話せるように、高校時代や英検を受けた時のテキストを見返したいと思う。